

二〇二四年欧州議会選挙と右派政党

——何が統一会派を妨げるのか——

山 本 直

はじめに

二〇二四年六月に実施された第一〇回欧州議会選挙（以下「二〇二四年選挙」）では、右派から極右に位置づけられる政党がEU各国で伸張した。^① イタリアのジョルジャ・メローニ首相が率いる「イタリアの同胞（FID）」の一八増をはじめ、マリーヌ・ルペンのフランス「国民連合（RN）」も七増であった。その他、オランダ「自由党（PVV）」と「ドイツのための選択肢（AfD）」が各々六増、四増となっている。右派に位置するすべての主要政党が議席を増やしたわけではない。それでも、全体としては左派やリベラルの系統にある諸政党が各国で苦戦したことと対照的な

結果となった。⁽²⁾

EU各国における右派政党の大半は、移民とりわけ不法移民と難民の国外退去を求めている。イスラム教や外国人への嫌悪感を隠さない政党もある。これらの政党はまた、EUの中央集権的、官僚的もしくはエリート主義的な組織のあり方、ならびに脱炭素を促すEUの環境政策を批判する傾向にある。⁽³⁾ このように共通項の多い右派政党であるが、欧州議会で統一会派が結成されないのは何故であろうか。

これまで欧州議会では、右派政党からなる少なくとも二つの会派が並存する状態が続いた。その状態は、二〇二四年選挙でも解消しないばかりか、右派政党からなる第三の会派がさらに結成されるところとなった。⁽⁴⁾ たしかに欧州議会の『手続規則』にしたがえば、少なくとも七つの加盟国から二三名の議員が集まれば独立した一つの会派を結成できる。⁽⁵⁾ これにより、欧州議会の予算で会派の専属スタッフを雇い、専用の事務所を開設することも可能となるのである。⁽⁶⁾ とはいえ、政治的な影響力を考慮すれば、会派は大きいほど享受できるメリットも増すであろう。すなわち、院内委員会の委員長ポストの獲得、EUの立法と予算政策への関与、さらには欧州委員会委員の人事といった局面で強い存在感を発揮しうる。そのようなメリットがあるにもかかわらず、統一会派の結成に至らない要因を明らかにすることを本稿は試みる。

このような本稿の試みは、一見したところ相似する欧州の右派政党間に横たわる隔たりを理解することにも寄与しうる。右派というイデオロギーの中にさまざまな思考と態度があることは、J-Y・カミュとN・ルブルが二〇一五年の著書『ヨーロッパの極右』で描いたとおりである。⁽⁷⁾ そのような雑多性の一端が、二〇二〇年代半ばのEUにどのように表徴されているかを本稿は探究することになる。

以下では、まず、欧州議会における右派政党の会派の歩みを振り返る（Ⅰ）。次いで、二〇二四年選挙をめぐる右派政党の離合集散を概観した後（Ⅱ）、同選挙で離合集散が起きた諸要因について考察する（Ⅲ）。最後に、会派の内部における政党間の結束状況を俎上に載せることにする（Ⅳ）。なお、本稿で言及される会派の名称と人物の肩書は、原則として二〇二四年選挙が実施された二〇二四年六月時点のものである。

I 欧州議会における右派会派の経緯

欧州議会における右派会派の先駆けとなる会派は、「欧州右派（ER）」であろう。一九八四年の第二回欧州議会選挙を機にフランス「国民戦線（FN）」（のち国民連合RNに改称）や「イタリア社会運動（MSI）」等が結成したERは、当時においてこそ四三四議席中一七議席と泡沫的な存在であった。しかしその後、ERの後継会派を含む右派会派は着実に存在感を強めていく。

右派会派が並存する状態が生まれ、かつ定着するのは、中・東欧諸国がEUに加盟した二〇〇〇年代半ばのことであるといえる。二〇〇四年の第六回欧州議会選挙後には、「独立・民主主義（IND／DEM）」および「諸民族の欧州のための連合（UEN）」の二会派が組織された。前者のIND／DEMの顔ぶれは、イギリス独立党（UKIP）（二一議席）、「ポーランド家族同盟（LPR）」（二〇議席）、イタリア「北部同盟（LN）」（四議席、後に同盟Legha）等であった。当時の全七三三議席のうち、最大で三七議席を占めている。後者のUENは最大で二七議席であり、イタリア「国民同盟（AN）」（九議席）、ポーランド「法と正義（PiS）」（七議席）、アイルランド「フィアナ・フォイル

― 共和党 (F E) 〔四議席〕等の参加があった。

興味深いのは、これら二つの会派が、後年にマクドネルとワーナーが「偉ぶる (Proud) 右派」および「お上品な (respectable) 右派」と表現した分類に適合しうることである。⁽⁸⁾ 偉ぶる右派とは、E P Pをはじめとする主流の会派と協力や協調を行う余地を見せず、これらの会派から常に距離をおこうとする勢力である。他方でお上品な右派は、偉ぶる右派よりも穏健であり、E P Pなどと協力または協調する可能性を排除しない。I N D / D E M と U E N はそれぞれ偉ぶる右派、お上品な右派として対比することができるであろう。このような二つの会派が合計で六〇を超える議席数を得て、欧州議会である程度の存在感を示すようになる。

二〇〇〇年代後半から二〇一〇年代にかけて、各国の右派政党はさらに伸張するものの、そこには二つの変化が見られる。第一に挙げられるのは、欧州保守改革党 (E C R) が新たに結成されたことである。その始まりは、欧州議会の最大会派である欧州人民党 (E P P) とイギリス保守党が提携を解消したことにあった。イギリス保守党は E P P との提携から、欧州統合のさらなる深化に懐疑的な他国の有志との連携に切り替えたのである。⁽⁹⁾ E C R はしばらくの間、イギリス保守党とポーランド P i S の双頭体制の外観を呈していた。その後、イギリスの E U 脱退が、したがって保守党の E C R からの離脱が決定的となった時期に、E C R はオランダ「民主主義フォーラム (F v D)」、イタリア F D I およびスウェーデン民主党 (S D) といった政党を積極的に受け入れることになった。その結果、二〇一九年の第九回欧州議会選挙では、イギリス保守党が大幅に議席を減らすものの、これら「新顔」の存在によって E C R は安定した議席を保つことになった。

マリーヌ・ルペンという、従来の右派指導者のイメージにそぐわない人物が登場したことが第二の変化を特徴づけ

ている。マリーヌは、父ジャン＝マリーからFN党首の座を継いだ後、党のいわゆる脱悪魔化を進めた。党名をFNから国民連合(RN)に改称したのも、党に対する有権者のイメージを向上させるためであった。¹⁰ それとともにマリーヌ・ルペン、オランダPVV、ベルギー「フラームス・ベランフ(VB)」ならびにオーストリア自由党(FPO)等が参加する会派「民族と自由の欧州(ENF、フランス語ではENL)」を結成した。これが、後年(二〇一九年)の欧州議会選挙を機に「アイデンティティと民主主義(ID)」となる会派である。マリーヌは二〇二一年九年にRN党首職をジョルダン・バルデラに譲るものの、RNでの指導的な立場は維持していた。

II 二〇二四年欧州議会選挙と離合集散

欧州議会の議員は、EU条約にしたがい五年に一度の直接普通選挙で選出される¹¹。これまでのところ、その議席は加盟国の人口規模に応じて各国に割当てられており、選挙も加盟国毎に実施される¹²。そのようにして二〇一九年と二〇二四年に実施された結果を会派毎に集計したのが表1である。最大会派のEPPは二〇〇〇年代以降退潮傾向にあったが、二〇二四年選挙ではやや持ち直した。他方において、中道から左派に位置する四会派のうち、欧州統一左翼・北欧緑左翼(GUE/NGL)を除く三会派、すなわち刷新欧州(RE、中道リベラル)、社会民主進歩連合(S&D、中道左派)および緑・欧州自由連合(Greens/EFA、環境)がいずれも議席減となった。

こうした中で右派会派であるECRとIDは、いずれも議席を増やした。ECRの議席増は、イタリアFDIの躍進によるところが大きい。それに対して、IDの伸張は、フランスRN、オランダPVVあるいはオーストリア

表 1 会派所属議員の推移 (人)

	欧州統一左翼・北欧緑左翼 (GUE/NGL)	社会民主進歩連合 (S&D)	緑・欧州自由連合 (Greens/EFA)	刷新欧州 (RE)	欧州人民党 (キリスト教民主) (EPP)	欧州保守改革党 (ECR)	アイデンティティと民主主義 (ID) ※1	主権的国民の欧州 (ESN)	無所属	合計
2019年	41	154	74	108	182	62	73	—※2	57	751
2024年	46	136	53	77	188	78	84	25	33	720
増減	5	△18	△21	△31	6	16	9	25	△24	△31

※1 2024年選挙後に「欧州の愛国者 (PfE)」に合流。

※2 2024年選挙後に結成のため、2019年選挙では未結成。

(出典：欧州議会ウェブサイトより筆者作成)

FPÖといった政党の各々の議席増が集積されたものである(以上、表2参照)。さらには、二五議席をもつ「主権的国民の欧州 (ESN)」が新たに結成されている。

ECR、IDおよびESNの三会派は、そもそもいかなる経緯から並存することになったのか。その発端は、二〇二四年選挙の直前の二〇二四年五月に、IDがドイツAfDを除名したことにあった。先に触れたように、IDは、前出のENFを後継するかたちで二〇一九年選挙を機に発足した会派であった。AfDは、二〇一四年にECRに参加した後、フランスRNやイタリアLega等とともに、二〇一九年発足のIDの下に合流した。しかし、マリーヌ・ルペンをはじめとするフランスRNやデンマーク人民党 (DF) の意向を受けて、AfDは二〇二四年選挙を目前に除名されたのである。除名されたAfDを中心に新たに結成されたのが、ESNであった。AfDが除名された理由については次章で触れることにしたい。

次いで、二〇二四年選挙の終了後に「欧州の愛国者

表 2 2024年欧州議会選挙における右派政党の獲得議席（※1）

政党名	加盟国	党首、指導者	獲得議席	増減 (2019年比)	同国への 議席配分	議席占有率 (%)	選挙時の 所属※2	選挙後の 所属
国民連合 (RN)	フランス	ジルデラ、ルベソ	30	+7	81	37.0	ID	PfE
イタリヤの同胞 (FDI)	イタリヤ	メローニ	24	+18	76	31.6	ECR	ECR
法と正義 (PiS)	ポーランド	カチンスキ	20	-7	53	37.7	ECR	ECR
ドイツのための選択 (AfD)	ドイツ	クルパ、バイデル	15	+4	96	15.6	ID	ESN
フイデス	ハンガリー	オルバン	11	-2	21	52.4	無所属 ※3	PfE
同盟 (Lega)	イタリヤ	サルビーニ	8	-21	76	10.5	ID	PfE
ANO2011	チェコ	ハビシュ	7	+1	21	33.3	RE	PfE
自由党 (PVV)	オランダ	ウイルダース	6	+6	31	19.4	ID	PfE
オーストリア自由党 (FPÖ)	オーストリア	キクル	6	+3	20	30.0	ID	PfE
VOX	スペイン	アバスカル	6	+2	61	9.8	ECR	PfE
ルーマニア統一同盟 (AUR)	ルーマニア	シモン	6	—※4	33	18.2	—	ECR

※1 獲得議席の多い順に掲載した。6議席以上を獲得した政党に限定した。

※2 選挙前の所属を含む。

※3 2020年まで欧州人民党 (EPP)。

※4 2019年当時は未選出。

(出典：各種ウェブサイトより筆者作成)

〔P f E〕が結成された。A f Dを除名したI Dの諸政党が、このP f Eの下に合流することになる。その結果、I Dへの参加を継続する政党が急減し、I Dは五年の短命に終わることになった。

P f E結成を率先したのは、フィデス党首でハンガリー首相のオルバン・ビクトルであった。オルバンは、二〇二四年六月三〇日にオーストリアの首都ウィーンで、チェコのANO二〇一一党首であるアンドレイ・バビシュ元首相、ならびにオーストリアFPÖ党首のヘルベルト・キクル元内相らとともにP f Eの結成を宣言した。

二〇二〇年にE P Pから脱退したフィデスは、欧州議会で無所属の状態にあった。¹³ ANO二〇一一は、二〇一四年の欧州議会選挙で議席を得て以降、中道リベラルのRE (当時は欧州自由民主連合ALDE) に参加していた。バビシュは、P f Eの結成のために、REから脱退する旨を前週に表明していた。オーストリアFPÖは、ENFからI Dへと続く右派会派に継続的に参加する政党であった。

そのP f Eに多くの政党が合流するのである。皮切りとなったのは、スペイン「VOX」であった。同党は、E C Rを脱退した上で、二〇二四年選挙から約一か月後の七月五日に参加を表明した。これに、前述のようにI Dの諸政党が続いた。このような動きが呼び水となり、「ラトビア・ファースト(L P V)」やギリシャ「理性の声(F L)」さらにはチェコ「自身のためのドライバー(A U T O)」といったI Dに未参加であった小規模政党もP f Eに合流した。¹⁴

七月八日には、一二カ国から八四名の議員が集まることが明らかとなった。前スロベニア首相のヤネス・ヤンシヤやスロバキア首相現職のロベルト・フィツォら、オルバンと政策的に近いとされるにもかかわらず参加を差し控える指導者もあった。¹⁵ しかし、会派として認められるために必要な条件は十分に達成された。

以上のように、P f Eが結成される一方で、I Dから除名されたドイツA f DがE S Nを結成することになる。結成時に二五名を数えたE S N議員であるが、その半数以上（二四名）がA f Dによって占められた。E S Nに参加した政党には、さらにポーランド「新たな希望（N N）」、ブルガリア「復興」、チェコ「自由と直接民主主義」およびフランス「再征服」等があった。

P f EとE S Nは、こうして別個の会派として欧州議会に登場した。他方であまり変化を見なかったのがE C Rである。たしかにE C Rは、イギリスのE U脱退の影響を直截に受けた。二〇二四年選挙の後には、先述のようにスペインV O Xを失いもした。とはいえE C Rの運営は、二〇二〇年四月にイタリアF D Iのメローニ党首が代表に就いて以降は、概して安定したものであった。

Ⅲ 離合集散の要因

欧州議会で三つの右派会派が並存する状態は、前章で概観したように、各国の右派政党の離合集散によるものであった。それでは、このような離合集散は、右派政党のいかなる動機に基づいているのだろうか。

E C R、P f EおよびE S Nは各々にウェブサイトを開設している。それらのウェブサイトでは政治綱領が公開されているものの、互いにかなり重複する内容である。例えば移民について、これらの会派のいずれもが、欧州の対外国境を保護する必要性に言及しつつ、「亡命が認定されなかった人々の出身国への送還」（E C R）、「不法移民の抑止」（P f E）、「移民の統制ならびに受容できる水準への縮小」（E S N）をうったえている。国家主権、伝統、ならびに

欧州の文化を重視していること、ならびにEUの過度に強い権限に異を唱えていることも共通する。ECRのウェブサイトには次の表現がある。「(EUは)あまりに中央集権的であり、あまりに野心的であり、一般市民の現状についてあまりに理解不足である」¹⁶⁾。P f EとESNのウェブサイトにも、各々に以下の文言がある。「EUは、我々欧州の郷土である国家、地域および小共同体の意思に背いている」、「EUの強まる集権化、肥大する官僚制、透明性の欠如、赤字の財政同盟建設を(我々は)拒否する」¹⁷⁾。用いる表現のニュアンスと程度には差異があるものの、主張される方向性は、三党派ともに類似している。

このように、政治綱領に違いが見当たらないとすれば、何が各国の右派政党を離合集散させるのか。偉ぶる右派およびお上品な右派という、先述したマクドネルとワーナーの分類ははまだ適用可能であると考えられる。この分類に則れば、P f Eは前者、ECRは後者として位置づけることができる。しかし各種の報道を見るかぎり、この分類からは推察しがたい要因もある。そのような要因として、以下の要因を挙げることができる。

(a) A f Dにおけるナチス認識

ルペンらの意向に基づいて、IDがドイツA f Dを除名したことを前章で触れた。その背景には、A f Dの上層部に見られたナチスに寛容な姿勢が懸念されたことがある。

除名への伏線となるのが、ドイツの極右運動家らが二〇二三年一月に開いた会合である。ベルリン近郊のポツダムで秘密裏に開かれたこの会合では、ドイツに同化しようとしないう移民および市民を国外に多数退去させる計画が示されたという。会合が開催された事実、ならびに五名のA f D議員が出席していたことが翌二〇二四年一月に露呈した際、ルペンは、このような計画には賛同できないと表明した。A f Dの共同党首の一人であるアリス・バイデルは

弁明したものの、ルペン¹⁸は来たる二〇二四年の欧州議会選挙に向けてA f Dと共闘できるのか自問する一幕があった。

ルペンの堪忍袋の緒は、選挙を目前に控える五月に切れるところとなった。その直接の引き金になったのが、ドイツの選挙区におけるA f D候補者リストの筆頭に挙がっていたマクシミリアン・クラール候補の発言である。イタリヤ・レプブリカ紙との五月一八日付インタビューでクラールは、「SSの制服を着た者たちがみな犯罪者であったとまではいえない」と述べた。SSとはナチス親衛隊のことである。クラールは、九〇万人に上るとされるSS隊員の多くは犯罪に手を染めたが、すべての隊員がそうしたわけではないといった旨の発言を行った。この発言をめぐり、ルペンは五月二二日、自国フランスのラジオ放送で「A f Dは挑発ばかりしている。そうした動きと明確に袂を分かたつ時が来た」と明かした。ルペンはまた、「すぐにでも防疫線を張りたい」とも述べている¹⁹。ここでいう防疫線とは、極端な思想をもつ勢力との協力を完全に遮断することを意味する。フランス国内でこの言葉は、中道から左派にかけて、あるいはリベラルに位置する政治家によって、彼女との協力を拒否する際に好んで用いられていた。その言葉を今次はルペンが用いたのである。

ルペンは自身ならびに自党の脱悪魔化を進めていた。二〇二七年に実施が予定されるフランス大統領選挙で初当選するために、また同年までに実施される総選挙でさらに躍進するために、国内の穏健層からの支持を射程に入れる必要があった。そのような彼女にとって、ドイツA f Dの親ナチス体質は頭痛の種であっただろう。広く知られているように、第二次世界大戦時にSSは、ナチスの片腕としてフランス支配と残虐な行為に加担していた。そのSSを擁護するのときA f Dとの関係を維持することは、フランス国内でルペンとRNへの支持が伸び悩みリスクとなり

えた。⁽²⁰⁾

さらにいえば、IDによるAfDの除名は、AfDと他の参加政党との間に見られる対EU政策の相違にも起因した可能性がある。IDに参加する政党の多くは、本来、「問題の絶えないEU」から自国を脱退させることを標榜していた。しかし、ルペンやオランダPVVのウィルダースらは次第に、EUの「改革」を通じた自国の安全および繁栄へと主張を転換していた。⁽²¹⁾ 自国を脱退させることなく、加盟国に留まりながらEUを作り替えていく立場の方が、自党への支持を集めやすいと判断したのであろう。このような主張の転換が、一貫して脱退の選択肢を排除しないAfDとの距離を生んでいた。⁽²²⁾

IDがAfDの除名を決めた際、フランスRNのバルデラ党首は「新たな連携組織」を築く用意があると言及していた。⁽²³⁾ 彼のいうこの組織こそが、二〇二四年選挙後に結成されたPfeであった。

(b) 「権力者のペア」の不成立：オルバンとメローニ

二〇二四年欧州議会選挙の実施後にオルバン、バビシユおよびキクルらが結成を宣言したのがPfeであった。彼らが率いるハンガリーのフィデス、チェコANO二〇一一およびオーストリアFPÖに加えて、宣言後にはフランスRN等、IDに参加していた多く政党がこれに合流した。

Pfeの結成が注目されたのは、欧州議会で中道右派(EPP)と中道左派(S&D)に次ぐ第三の勢力に台頭したからであったものの、それだけではない。今や欧州における右派の顔となった面々、すなわちルペンやオルバン、さらにはウィルダース、マッテオ・サルビーニらの政党が名を連ねたからでもあった。しかしながら、結成を率先したオルバンから見れば、このようなPfe結成でさえも最良の成果とまではいえなかったであろう。なぜならオルバン

は、E C RとI Dの諸政党にフィデスが加わるという一大会派を構想していたからである。⁽²⁴⁾

フィデスは、二〇〇四年にE P Pに参加した中・東欧の政党の一つであった。二〇〇四年といえば、多くの中・東欧の国がE Uに加盟した年である。これらの国々で活動する政党は、それと時機を合わせるかたちで、自らの信条に合う会派に参加していた。フィデスはその後、二〇一〇年にハンガリーの国会選挙で大勝し、オルバンが八年ぶり二度目の首相就任となった。その後フィデスは、ハンガリーの民主体制を後退させたかどで批判するE P Pから二〇二〇年に脱退した。脱退後のフィデスは、P f Eが結成されるまでは、欧州議会で無所属の地位に甘んじていた。

このような経緯を想起すれば、オルバンが二〇二四年の欧州議会選挙を機に一大会派の中核に躍り出ることを願っていたと考えても不思議ではない。E C RとI Dの諸政党にフィデスが加わる会派が成立すれば、それは第二勢力のS & Dはむろん、E P Pさえ脅かす勢力となる。E C R、I Dおよびフィデスの合流が難しいようであれば、次善策としてフィデスがE C Rに参加するかたちでもよい。オルバンは、このように考えていたようである。⁽²⁵⁾

しかし、このような野心のいずれも、二〇二四年の間に実現することはなかった。その理由はいくつか考えられるが、主な理由は、E C Rのメローニがオルバンとの合流に乗り気でなかったことである。

オルバンとメローニは、いずれも加盟国首脳の地位にあった。それに加えて、反移民、欧州懐疑、反・性的少数者の権利等の点において一致する。そのため両名は、E U政治に影響を及ぼす「権力者のペア (power couple)」(E U Observer 紙) になる潜在的な条件を備えていた。とはいえ、メローニには、イタリア首相として優先的に取り組むべき課題があった。すなわち、悪化していた自国財政の健全化、ならびにコロナ危機からの経済的復興がそうである。これらの課題の解決に向けては、欧州委員会のウルズラ・フォンデアライエン委員長やマリオ・ドラギ前イタリ

ア首相と良好な関係を保つ必要があった。そのようなメローニにとって、とりわけフォンデアライエンと深刻な対立関係にあったオルバンと組むことは自身の政治的リスクになりえた。⁽²⁶⁾

(c) ロシア・ウクライナ戦争

ロシア・ウクライナ戦争への姿勢が異なることも、E C Rの諸政党とフィデスの距離を縮めるうえで障害となった。二〇二二年二月にロシアが隣国ウクライナを侵攻して以降、EUと大半の加盟国はロシアを非難し、経済、金融および外交分野を中心にロシアに複数回の制裁を発動した。それとともにウクライナに各種の支援を提供するのであるが、このような姿勢にE C Rの諸政党も賛同的であった。

真逆ともいえる立場を示したのがオルバンであった。オルバンは、N A T OとEUにとって第三国となる両国の戦争に関与すべきではないと主張し、中立的な姿勢を見せた。とはいえ実際は、ロシアのウラジミール・プーチン大統領とは良好な関係を保った。その一方で、ハンガリー系住民の処遇をめぐり軋轢のあったウクライナには、冷淡な態度を取り続けた。

二〇二四年二月に開かれた欧州理事会でメローニは、EUによる対ウクライナ支援の強化を拒否しないようにオルバンに要請した。それとともに、メローニは、フィデスのハンガリー施政への糾弾を控えるように他の加盟国首脳に求めたという。⁽²⁷⁾ ロシア・ウクライナ戦争への対応に限らずメローニは、欧州理事会の合意に向けて仲介役を期待されることがあった。そのようなメローニであるからこそ、オルバンに一方的に肩入れするわけにいかなかった。

E C Rには、ポーランドP i Sも参加していた。同じ中・東欧に位置する右派政党としてフィデスと盟友関係にあったP i Sの内部には、E C Rから脱退してまでもフィデスと連携すべしとする声があった。⁽²⁸⁾ それでもオルバンと

の連携に踏み切らなかったのは、ポーランドにおいてロシアを警戒する傾向が本来的に高かったからである。プーチンとの良好な関係を誇示するオルバンと合流すれば、ポーランド国内でのP i Sの支持が低下しかねなかったのである。⁽²⁹⁾

(d) ルペンとメローニの隔たり

オルバンのフィデスのみならず、ルペンのRNもまた、メローニ率いるFDIと同じ会派の下で共存できる状況にはなかった。

繰り返しとなるが、メローニは現職の国家首脳として、国内およびEU双方の政治に現実的に取組む立場にあった。ロシア・ウクライナ戦争に際しても、政治信条が一致しないであろうドイツのオラフ・ショルツ首相やフランスのエマニュエル・マクロン大統領、さらにはアメリカのジョー・バイデン大統領らと協調することが求められた。一方で、ルペンは、国家やEUで要職の地位にあつたわけではなく、むしろその潜在的な候補者として将来を語るべき立場にあつた。そしてそのルペンは、フランス国民を前に、プーチンと密接な関係にあつた過去を釈明することで手一杯であつた。⁽³⁰⁾

メローニとルペンの隔たりは、ロシア・ウクライナ戦争以外の領域でも垣間見える。例えば、人工妊娠中絶の是非をめぐり、ルペンは是とするが、メローニは否定的である。⁽³¹⁾ 反移民についても、少なくともその掲げ方に相違がある。フランスのルモンド紙のアラン・カバル氏は次のように指摘する。「(ルペンの) 国民連合が喧伝する移民の概念は、国民の不安を煽るためのものであり、イスラム教徒のテロ、郊外の暴動、社会的な偽善および犯罪といったものを、そして(イスラム組織ハマスがイスラエルを襲撃した) 二〇二三年一〇月七日以降の反ユダヤ抗議活動もまた、架空

の移民像へと結びつけている。実際のところ国民連合の言説は、少数者、とりわけムスリムである市民を標的にしている。そのうえでカバル氏は、メローニの言説にはこのような含みがなく、近隣国との外交的解決がここでは重視されていると分析する³²。一言で反移民とはいえ、強調される視点によってその意味合いは異なる。国内における社会統合の様式、旧植民地との関係、あるいは自国の地理的な位置等に依じて、政党の問題認識も変わってこよう。

メローニとルペンの連携は、イタリア Lega のサルビーニの存在ゆえに困難であったかもしれない。すなわちルペンは、長らくサルビーニと近い関係にあった。サルビーニとルペンは、欧州議会でも ENF から ID、さらには P f E へと常に同じ会派に属してきた。一方において、ともにイタリア人であるメローニとサルビーニは、たしかにイタリア国内で連立政権を組んでいるものの、そうであるがゆえの対抗意識も互いにあるだろう³³。このような状況が、ルペンとメローニを間接的に遠ざけた可能性がある。

以上において、右派政党間で見られた離合集散の要因を考察した。あらためて要約すると、政党関係者の歴史認識 (ドイツ AfD におけるナチス)、近隣の第二国間で起きた戦争への姿勢 (ロシア・ウクライナ戦争)、国家首脳としての対 EU 関係 (オルバンとメローニ)、社会的課題に対する認識 (移民や人工妊娠中絶)、一国内での連立関係と脱国境的連携の交錯 (ルペン・メローニ・サルビーニ) といったさまざまな要因が、右派政党の離合集散を生むとともに、統一会派の結成を阻害したと捉えられる。

IV 未完の統一会派 — 右派政党間の不一致 —

前章では、二〇二四年六月の欧州議会選挙で右派政党の離合集散を生んだ要因を考察した。このような考察は、これらの要因が除去される暁には右派政党の離合集散が解消しようという議論に結びつきがちである。そのような議論はまた、オルバンが構想した類の右派による統一会派の実現可能性にまで広がりを見せるだろう。

このような議論にも一理ある。ドイツAfDの内部でナチス的思考が退潮したり、イタリアの財政問題が解決したり、あるいはロシア・ウクライナ間で恒久的な停戦が成立したりすれば、ECR、PfEおよびESNの間に横たわる溝は埋まっていくかもしれない。とはいえ、これらの要因の少なくとも一部は、実際は除去されることが容易ではない。右派政党を隔てる別の要因が今後新たに生まれることも考えられる。

右派政党間の結束は、そもそも脆弱さを含みもつ。これらの右派政党は、保守主義、民族主義もしくは差別主義といった信条に依拠するため、民族、言語および宗教等を異にする国外政党との協力に通常は消極的である。反移民と欧州懐疑、さらには反気候変動や反多様性といった共通項の下では結集しようもの、他の政治課題および外交課題をめぐる姿勢は同じ会派内でもしばしば異なる。

さらには、これら右派政党の多くがポピュリスト政党であることも考慮に入れる必要があるだろう。ポピュリストは、自国での支持を得る術に長ける一方で、他国の集団や指導者と協調関係を保つことは不得手であるように思われる。

以上の状況を、PfEを例に見ておこう。ロシア・ウクライナ戦争への姿勢の違いが離合集散の一因であったこと

は、すでに前章で論じた。しかしこの戦争については、P f Eの内部でも一致があったわけではない。オルバン、キクルおよびサルビーニらがロシアを擁護する姿勢を示したものの、ルペンのように、自らの政治キャリアを考慮してロシアと距離をおいた指導者もある⁽³⁴⁾。ウィルダースやスペインのアバスカルは、ロシアと相対するウクライナへの積極的な支援を表明している⁽³⁵⁾。

P f Eに参加する政党間では、二〇二三年一〇月以降に激しくなったイスラエルとハマスの戦闘をめぐっても相違があった。多くのメンバーがイスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ政権の対応を支持したものの、キクル等、不支持の立場を表明した者もいた。通商産業分野でも、国内市場へのアクセスを制限したい西欧の指導者と輸出志向の中・東欧の政党の間で潜在的な亀裂があった⁽³⁶⁾。

性的少数者の権利保護や人工妊娠中絶といった争点でも姿勢は異なりうる。オルバンら中・東欧の指導者は、これらを認めることに概して否定的であった。その一方で、ルペンやウィルダースら西欧の指導者は肯定的な姿勢を示している⁽³⁷⁾。西欧の指導者が肯定的である動機については、議論の余地がある。というのも、それが性的少数者や女性の権利保護を促すべきという信条によるのか、あるいはこれらの権利を許容しないであろうイスラムを批判する手段として利用しているのか不明だからである⁽³⁸⁾。ともあれ、同じP f Eという会派に属しながらも、少なくとも領域において姿勢の相異が見られることは否定できない。

政治学者のマクドネルとワーナーは、二〇一〇年代の欧州議会議員の投票行動を分析した。そこで明らかとなったのは、当時の右派会派に所属する議員の結束が、他の諸会派と比べて弱いことであった⁽³⁹⁾。このような結束の弱さが、近い将来に急速に解消に向かうとは思えない。たとえ近い将来に統一会派か、あるいはそれに近い規模の会派が結成

されたとしても、長期的な持続を想像することは難しいであろう。

おわりに

本稿では、EU各国の右派政党が統一会派を形成しない要因について、二〇二四年に実施された欧州議会選挙を手がかりに概観した。各国の右派政党は、いずれも反移民、ならびに中央集権的なEUの弱体化を自国の有権者にうたえている。そうすることで支持を広げながらも、一部の政党の党員によるナチスへの傾倒、ロシア・ウクライナ戦争に対する姿勢、EUとの実際的な協力関係、さらには社会問題認識等から一大勢力を形成するには至らなかったのである。

同じ会派に所属する右派政党の間でも、相互の結束には疑念が残った。このような状況である限り、統一会派の誕生は奇跡的にありえたとしても、その定着を展望することは難しいであろう。

右派政党の統一会派を欠くとはいえ、欧州議会における右派会派の所属議員は増えた。この変化を警戒する他会派は、右派会派の排除を試みた⁴⁰。フォンデアライエン欧州委員会委員長の再任に向けた協議に加え、欧州理事会の常任議長やEU外務上級代表の人選作業でも、他会派は右派三会派を慎重に排除した⁴¹。しかし他方では、右派会派の一部がEPPとともに、欧州議会でも多数派を形成する局面も見られる⁴²。むしろ、EPP議員が右派との多数派形成を求めなくとも、右派の議員らが賛同することもあるだろう⁴³。

EUに加盟する諸国では、右派政党が急速に政権運営に進出しつつある。ニュースメディアの『ポリティコ』は欧

州議会選挙前に、二七カ国のうち六カ国で極右 (Hard-right) の政党が政権参加していると報じた。この六カ国とはすなわちイタリア、フィンランド、スロバキア、ハンガリー、クロアチアおよびチェコである。同メディアはさらに、スウェーデン政府が民族主義政党の協力の下で存続していると⁽⁴⁴⁾した。このような加盟国がさらに増えれば、欧州議会のみならず理事会と欧州理事会、さらには欧州委員会といったEUの他機関でも右派の影響力が強まることになる。

(1) 現代の欧州政治では、右派政党と極右政党を区別することは容易ではない。これらの政党の多くは、いわゆるポピュリストであり、国民の間に分断をもたらすことを躊躇しない。こうした政党は、しばしばネオ・ファシスト、ネオナチ、急進右派、排外主義 (ネイティブリスト)、レイシスト、反移民、反外国人、反エスタブリッシュメント、欧州懐疑などの主張を含みもつ (e.g., Murat Aktas, "The rise of populist radical right parties in Europe", *International Sociology*, vol.39, no.6, 2024, pp.595-596)。本稿では、掲げられるイデオロギーの詳細に関わらず、右派から極右に至る連続線上に位置すると考えられるすべての国内政党を右派政党として言及する。

(2) ただしドイツの「ザーラ・ワーゲンクネヒト同盟 (BSW)」等、躍進した左派政党もある。Cynthia Kroet, "European elections: Far left lost, yet unexpectedly gained in the north", *Euronews*, 10 June 2024.

(3) 近年の研究は、欧州議会において左右双方の議員と党派が、各々において単一の次元の下に連携しつつあることを明らかにしている。右派の議員と党派は、経済市場の自由化および保守的な社会・文化政策に賛同しつつ、EU統合を支持しないという方向性を以前にも増して共有している。Simon Hix, Richard Whitaker and Galina Zapryanova, "The political space in the European parliament: Measuring MEPs' preferences amid the rise of Euroscepticism", *European Journal of Political Research*, vol. 63, 2024, pp.153-171.

(4) ここでは二つの党派とは、欧州保守改革党 (ECR)、「アイデンティティと民主主義」(ID) および「主権的国民

の欧州」(ESEN) のようにある。これらについては本文で後述する。

- (5) European Parliament, RULES OF PROCEDURE, 10th parliamentary term, July 2024, Rule 33.2.
- (6) European Parliament, “What are political groups and how are they formed?” <https://www.europarl.europa.eu/news/en/faq/14/what-are-political-groups-and-how-are-they-formed>. Accessed: 26 December 2024.
- (7) Jean-Yves Camus et Nicolas Lebourg, *Les Droites extrêmes en Europe*, Éditions du Seuil, 2015 (ジャン＝イヴ・カミュ、ニコラ・ルブール、南祐三監訳、木村高子訳)『ヨーロッパの極右』みすず書房、二〇一三年)。
- (8) Duncan McDonnell and Annika Werner, “Respectable radicals: why some radical right parties in the European Parliament forsake policy congruence”, *Journal of European Public Policy*, 2017, pp.1-17; Duncan McDonnell and Annika Werner, *International Populism: The Radical Right in the European Parliament*, Oxford University Press, 2019.
- (9) Corbett, Richard, Francis Jacobs and Darren Neville, *The European Parliament*, 9th edition, John Harper, 2016, pp.105-109.
- (10) ただし国民連合の名称自体は、FNが初めてフランス国民議会に進出した一九八〇年代後半に「国民戦線—国民連合」として用いられていた。渡邊啓貴『ルペンと極右ポピュリズムの時代』白水社、二〇二五年、二〇九—二一〇頁。マリヌ・ルペンの下での党の脱悪魔化については、同上、第七、VIIIおよびIX章参照。
- (11) EU条約第一四条三項。
- (12) ただし、その実施は欧州議会直接普通選挙法に基づく。EU運営条約二二三条参照。
- (13) フィデスの脱退については、山本直『オルバンのハンガリー』法律文化社、二〇二三年、第四章参照。
- (14) See, Piet Ruig, “Orbán’s Patriots become third-largest group in European Parliament”, *EUobserver*, 9 July 2024.
- (15) Natália Silenská, “Fico’s Smer will not join new Patriots for Europe group, cites ideological divide”, *Porta24*, 12 July 2024; Ana Koren, “SDS ostaja del EPP, mnenja znotraj stranke so različna”, *Porta24*, 7 septembra 2024. https://portal24.si/sds-ostaja-del-epp-mnenja-znotraj-stranke-so-razlicna/#google_vignette. Accessed: 26 December 2024.

- (16) Cited in ECR Group, “Visions for Europe”, https://ecrgroup.eu/vision/safeguarding_citizens_borders. Accessed: 26 December 2024.
- (17) Cited in PATRIOTS.EU, “Our Political Programme -manifesto”, <https://patriots.eu/manifesto>; ESN Party, “Political Program”, <https://esn-party.eu/political-program>. Accessed: 26 December 2024.
- (18) “French far-right National Rally splits with Germany’s AfD”, *Deutsche Welle*, 22 May 2024; Jess Parker and Ido Vock, “German far-right AfD in disarray after Nazi remark”, *BBC News*, 22 May 2024.
- (19) John Henley, “Europe’s far right in disarray as Germany’s AfD candidate resigns”, *The Guardian*, 22 May 2024; Parker and Vock, *op.cit.*
- (20) Victor Goury-Laffont, Eddy Wax and Sarah Pailou, “France’s National Rally won’t sit with Alternative for Germany in EU Parliament”, *Politico*, 21 May 2024; Pauline von Pezold, Eddy Wax and Nicholas Vincour, “Far-right ID group expels Alternative for Germany”, *Politico*, 23 May 2024; Eddy Wax, “Europe’s far right is splintering”, *Politico*, 23 May 2024; Henley, *op.cit.* ルペンはその後二〇二五年二月に公金横領で有罪判決を受けた。そのため大統領選挙への出馬は不透明となった。
- (21) See, Cagan Koc, “Wilders Drops Pledge to Leave EU Ahead of European Elections”, *Bloomberg*, 5 April 2024; Philippe Bernard, “Législatives 2024 : « Le désastre des années Brexit au Royaume-Uni préfigure, en mode atténué, ce qui pourrait attendre les Français après le 7 juillet »”, *Le Monde*, 30 juin 2024.
- (22) 『フライングシヤル・タイムズ』との二〇二四年一月のインタビューにおいて、AfDのバイデルは、イギリスのEU脱退を「大いに正しいもの」と評価した。自国で政権に就いた際には、EU脱退の是非を問う国民投票を実施する意欲も見せた。
- (23) Guy Chazan, “German far-right leader hails Brexit as ‘model for Germany’”, *Financial Times*, 22 January 2024.
- (24) Róbert László and Richárd Demény, “Hungary’s domestic politics turned upside down, but this is not the end of the Orbán

- regime”, Heinrich-Böll-Stiftung (cz.boell.org), 1 July 2024.
- (25) Ruig, *op.cit.*
- (26) Carlo Martuscelli and Jacopo Barigazzi, “Veni, vidi, veto: Giorgia Meloni’s march on Brussels”, *Politico*, 22 September 2022; Eleonora Vasques, “Von der Leyen and Orbán seek EU allies, both courting Meloni”, *Euroobserver*, 24 May 2024. 第八期の欧州議会（二〇一四―二〇一九年）における野党議員の活動を分析したブラックとベームによる「ソフトな欧州懐疑主義」であるECR所属議員とGUE/NGL所属議員は、「ハードな欧州懐疑主義」であるENF所属議員よりも欧州議会の立法活動に積極的に関わっている (Nathalie Brack and Anne-Sophie Behm, “How Do Eurosceptics Wage Opposition in the European Parliament? Patterns of Behaviour in the 8th Legislature” in Petra Ahrens, Anna Elomäki and Johanna Kantola, eds., *European Parliament’s Political Groups in Turbulent Times*, Palgrave Macmillan, 2022, pp.147-172)。ENFを実質的に後継し、かつフェイスも参加するPEFの所属議員とECR議員とは、欧州議会の立法活動に向けた参加の程度が異なる」と推論していることがわかる。
- (27) Andrew Rettman, “Meloni-Orbán: the new EU ‘power couple’ but for how long?” *Euroobserver*, 3 February 2024.
- (28) Eddy Wax, “Poland’s Law and Justice ‘50/50’ about leaving Giorgia Meloni and joining forces with Viktor Orbán”, *Politico*, 27 June 2024.
- (29) Vincenzo Genovese and Jorge Liboreiro, “Poland’s Law and Justice says no to Orbán’s Patriots and stays with Meloni’s group in EU Parliament”, *Euronews*, 3 July 2024.
- (30) Victor Goury-Laffont, “French far right calls out ‘cabal’ after new report on Russian interference”, *Politico*, 3 January 2024; Nicholas Vinocur, “French election: Nazi attire and racist comments dog Le Pen’s campaign”, *Politico*, 7 July 2024.
- (31) Martuscelli and Barigazzi, *op.cit.*; Angela Giuffrida and Ashifa Kassam, “Italy accused of scrapping safe abortion guarantee from G7 declaration”, *The Guardian*, 13 June 2024; Clément Guillou, “In a shift in views, Marine Le Pen supports constitutional protection for abortion access”, *Le Monde*, 24 November 2024.

- (32) Allan Kaval, “Giorgia Meloni and Marine Le Pen have different immigration strategies”, *Le Monde*, 7 September 2024, updated on 8 September 8, 2024.
- (33) E.g., Alessia Peretti, Sarantis Michalopoulos and Simone Cantarini, “EU, US elections widen Italy’s Meloni-Salvini ideological rift”, *EURACTIV*, 12 March 2024.
- (34) See, “Selenskyj dankt in Rede Österreich”, Österreichischer Rundfunk (ORF), 30 März 2023, <https://orf.at/stories/3310757/>; “Italy: Parliamentary Elections”, Center for Strategic & International Studies (CSIS), September 25, 2022, <https://www.csis.org/programs/europe-russia-and-eurasia-program/projects/european-election-watch/italy>. Accessed: 7 January 2025. 山本‘前掲書’第八章。
- (35) Hugo Marcos-Marne, “The Spanish Radical Right under the shadow of the invasion of Ukraine”, in Gilles Ivaldi and Emilia Zankina, eds., *The Impacts of the Russian Invasion of Ukraine on Right-wing Populism in Europe*, European Center for Populism Studies (ECPs), 8 March, 2023; Chris Nijhuis, Bertjan Verbeek and Andrej Zaslove, “Disagreement among populists in the Netherlands: The diverging rhetorical and policy positions of Dutch populist Radical Right parties following Russia’s invasion of Ukraine”, in Ivaldi and Zankina. *ibid.* See also, Julia Kaiser, “Orbán’s far-right Patriots for Europe sidelined over committees, blocking its influence”, *The Parliament*, 23 July 2024.
- (36) Matthew Karnitschnig, “How Hitler’s homeland became Israel’s European BFF”, *Politico*, 15 November 2023; Andrzej Sadecki, “Patriots for Europe: Orbán’s attempt to unite the radical right”, Centre for Eastern Studies (OSW), 23 July 2024, <https://www.osw.waw.pl/en/publikacje/analyses/2024-07-23/patriots-europe-orbans-attempt-to-unite-radical-right>. Accessed: 26 December 2024.
- (37) 畑山敏夫「マリヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム：変容するフランス政治と「国民戦線（FN）」にこころをさす」(四)『佐賀大学経済論集』第五一卷第二号、二〇一八年、五一―五五頁；Abel Mestre and Clément Guillou, “Rupture sur la forme mais continuité sur le fond : comment le Front national est devenu le Rassemblement national”, *Le Monde*, 05

- octobre 2022; Andrew Retman, “Drainpipe of shame: How Orbán hypocrisy became a gay icon in Brussels”, *EJObserver*, 24 September 2024.
- (38) Geert Wilders, *Marked for Death: Islam's War Against the West and Me*, Regnery Publishing, 2011, pp.209-211.
- (39) McDonnell and Werner, *op.cit.*, pp.164-167.
- (40) See, “Platform Cooperation statement between EPP, S&D, and Renew Europe”, <https://www.socialistsanddemocrats.eu/sites/default/files/2024-11/platform-cooperation-statement-between-epp-sd-and-renew-europe-en-241120.pdf>, Accessed: 6 April 2025.
- (41) Elena Sánchez Nicolás, “Leaders approve von der Leyen, Kallas, Costa for EU top jobs”, *EJObserver*, 28 June 2024; Barbara Moens, Eddy Wax and Max Griera, “Ursula von der Leyen wins second term as European Commission president”, *Politico*, 18 July 2024.
- (42) ‘シネズエラ大統領選挙についての決議’ならびに欧州森林破壊防止規則の修正案をめぐり、EURECおよびPFI議員がEPP議員と多数派を形成した。Mared Gwyn Jones with Vincenzo Genovese, “Right-wing MEPs unite to recognise González as Venezuelan president, weakening cordon sanitaire”, *Euronews*, 9 September 2024; Louise Guillot, “EPP accused of allying with far right to weaken deforestation rules”, *Politico*, 11 November 2024.
- (43) Johanna Kantola and Cherry Miller, “Party Politics and Radical Right Populism in the European Parliament: Analysing Political Groups as Democratic Actors”, *Journal of Common Market Studies*, vol.59, no.4, 2021, pp.790-791.
- (44) See, Giovanna Coi, “Mapped: Europe’s rapidly rising right”, *Politico*, 24 May 2024.